

## 18 イリノテカンとシスプラチン併用化学療法が著効した食道小細胞癌の1例

渡辺 庄治・富所 隆・高綱 将史  
外池 祐子・堂森 浩二・佐藤 明人  
福原 康夫・佐藤 知巳・吉川 明  
渡邊ゆかり\*

厚生連長岡中央総合病院内科  
新潟大学第三内科\*

症例は60歳、女性。平成23年9月より嚥下困難が出現、10月から嘔吐が出現したため、当科初診。CTで食道壁肥厚、左鎖骨上窩から噴門部、腹部大動脈リンパ節腫大を認め、上部消内視鏡にて胸部中部食道に2型進行癌を認めた。生検でsmall cell carcinoma, CD56陽性, synaptophysin陽性であり、食道小細胞癌T2N4M0, stage IV aの診断で全身化学療法の適応と判断した。Regimenは肺小細胞癌に準じてCPT-11とCDDPの併用化学療法を開始。4コース終了後のCTでは食道壁肥厚は改善、多発リンパ節腫大はほぼ消失した。内視鏡検査では原発巣に癒痕を認めたが内腔は拡張し遺残は認めなかった。

本邦での食道小細胞癌の頻度は全食道癌の0.7%程度、欧米でも1%前後を占めるにすぎない。また早期から肺、縦隔リンパ節、肝転移を来し、1年生存率は10%前後といわれる。一般に、小細胞癌は全身化学療法により一旦奏効しても再発することが多く治療に難渋するが、今回、食道小細胞癌に対しCPT-11とCDDP投与が有効であった症例を経験した。

## 19 当科におけるリンパ節転移陽性早期胃癌の検討

清水 孝王・中塚 英樹・森岡 伸浩  
沢津橋孝拓・宮下 薫

燕労災病院外科

【背景】リンパ節転移陽性早期胃癌に対する術後補助化学療法の導入に関しては、一定の見解がなく、胃癌治療ガイドライン3版で勧められてい

る治療は、胃切除のみで、術後の補助化学療法は勧められていない。そこで当科で切除したリンパ節転移陽性早期胃癌症例をretrospectiveに検討し、その妥当性を検討した。

【対象】2000年01月から2012年05月までに、当科で手術切除を行ったリンパ節転移陽性早期胃癌34例。

【方法】リンパ節転移個数1～2個のStage I B・3～6個のStage II A・7個以上のStage II Bに分けて検討した。

【結果】34例中、男性23例・女性11例。平均年齢63.1歳(42～84歳)。リンパ節転移個数1～2個・27例、3～6個・5例、7個以上・2例。15例では脈管侵襲を認めず、リンパ管侵襲のみを認めたのが12例、リンパ管・脈管ともに侵襲を認めたのが6例。無再発生存期間に関しては、有意な差は認められなかった。

【結語】3個以上リンパ節転移陽性の早期胃癌は再発リスクもあるため、術後補助化学療法を導入してもいいと考えられた。

## 20 食道癌切除後長期生存患者の予後因子

角田 知行・小杉 伸一・佐藤 優  
石川 卓・矢島 和人・神田 達夫

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】食道癌根治切除後の無再発長期生存患者の予後因子について明らかにする。

【対象と方法】1985年から2005年までに根治的食道切除を施行され、再発なく5年以上の生存を得られた220名を対象とした。9個の臨床病理学的因子について生存解析を行い、予後因子を検討した。術後生存期間の中央値は132か月(61から315か月)であった。

【結果】5年生存後の死因は、肺炎を含めた呼吸器疾患が27.5%、他癌死が25.0%を占めた。単変量解析では、75歳以上、男性、有併存症および呼吸器併存症群、術後呼吸器合併症群、放射線療法の併用群において有意に生存率が低下した。多変量解析では、男性、放射線療法の併用が独立し